

地球儀

牧野信一

青空文庫

祖父の十七年の法要があるから帰れ——という母からの手紙で、私は二ヶ月ぶりぐらいで小田原の家に帰った。

「このごろはどうなの？」

私は父のことを尋ねた。

「だんだん悪くなるばかり……」

母は押入を片付けながら言った。続けて、そんな気分を振り棄てるように、

「こっちの家はほんとに狭くてこんな時にはまったく困ってしまう。第一どこに何がしまつてあるんだか少しも分らない」などとつぶやいていた。

「僕の事をおこっていますか？」

「カンカン！」

母は面倒くさそうに言った。

「ふふん！」

「これからもうお金なんて一文もやるんじゃないツて——私まで大変おこられた」

「チェッ！」と私はセセラ笑った。きっとそうくるだろうとは思っていたものの、明らか

に言われてみるとドキツとした。セセラ笑ってみたところで、私自身も母も、私自身の無能とカラ元氣とをかえって醜^{みにく}く感ずるばかりだ。

「もうお父さんの事はあてにならないよ。あの年になってのことだもの……」

これは父の放蕩^{ほうとう}を意味するのだった。

「勝手にするがいいさ」

私はおこったような口調で呟^{つぶや}くと、いかにも腹には確然としたある自信があるような顔をした。こんなものの言い方やこんな態度は、私がこのごろになって初めて発見した母に対する一種のコケトリイだった。だが、私が用うのはいつもこの手段のほかはなく、そうしてその場限りで何の効もないので、今ではもう母の方で、もう聞き飽^あきたよという顔をするのだった。

「もう家もおしまいだ。私は覚悟している」と母は言った。

私は、母が言うこの種の言葉はすべて母が感情に走って言うのだ、という風にばかりことさらに解釈しようと努めた。

「だけど、まアどうにかなるでしょうね」

私は何の意味もなく、ただ自分を慰めるように易々^{いはい}と見せかけた。こんな私の楽天的な

態度にもすっかり母は愛想を尽かしていた。

母は、ちよつと笑いを浮べたまま黙つて、煙草盆たばこぼんを箱から出しては一つ一つ拭ふいていた。

私も、話だけでも、父の事に触れるのは厭いとになつた。

「明日は叔父さんたちも皆な来るでしょう」

「皆な来ると言つて寄こした」

また父の事が口に出そうになつた。

「躑躅つづじがよく咲いてる」と私は言つた。

「お前でも花などに気がつくことがあるの」

「そりや、ありますとも」と私は笑つた。母も笑つた。

「ただでさえ狭いのこれ邪魔でしょうがない。まさか棄てるわけにもゆかず」

母は押入の隅に嵩張かさばつてゐる三尺ほども高さのある地球儀の箱を指差した。――私は、ちよつと胸を突かれた思いがして、かろうじて苦笑いを堪こたえた。そうして、

「邪魔らしいですね」と慌あわてて言つた。なぜなら私はこの間その地球儀を思いだして一つの短篇を書きかけたからだつた。

それはこんな風にきわめて感傷的に書きだした。――『祖父は泉水の隅の灯籠とうろうに灯を入れてくるとふたたび自分独りの黒く塗った膳の前に胡坐あぐらをかいて独酌どくしゃくを続けた。同じ部屋の丸い窓の下で、虫の穴がところどころにあいている机に向つて彼は母からナショナル読本を習っていた。

「シイゼエボオイ・エンドゼエガアル」と。母は静かに朗読した。竹筒の置ランプが母の横顔を赤く照らした。

「スピニアトップ・スピニアトップ・スピンスピンスピン――回れよ独楽こまよ、回れよ回れ」と彼の母は続けた。

「勉強がすんだらこつちへ来ないか、だいぶ暗くなつた」と祖父が言った。母はランプを祖父の膳の傍に運んだ。彼は縁側へ出て汽車を走らせていた。

「純一や、御部屋へ行つて地球玉を持つてきてくれないか」と祖父が言った。彼は両手で捧げて持つてきた。祖父は膳を片づけさせて地球儀を膝の前に据えた。祖母も母も呼ばれてそれを囲んだ。彼は母の背中に凭よりかかつて肩越しに球を覗のぞいた。

「どうしても俺にはこの世が丸いなどとは思われないが……不思議だなア！」祖父はいつものとおりそんなことを言いながら二三遍グルグルと撫なで回した。「ええと、どこだった

かね、もう分らなくなっちゃった、おい、ちよつと探してくれ」

こう言われると、母は得意げな手つきで軽く球を回してすぐに指でおさえた。

「フエーヤー？ フエーヤー……チョツ！ 幾度聞いてもだめだ、すぐに忘れる」

「ヘーヤーヘブン」と母はたちどころに言った。

それは彼の父（祖父の長男）が行っている処の名前だった。彼は写真以外の父の顔を知らなかった。

「日本は赤いからすぐ解る」

祖父は両方の人差指で北米の一点と日本の一点とをおさえて、

「どうしても俺には、ほんとうだと思われない」と言った。

祖父が地球儀を買ってきてから毎晩のようにこんな団だんらんが醸かもされた。地球が円まるいとい

うこと、米国が日本の反対の側にあること、長男が海を越えた地球上の一点に呼吸していること——それらの意識を幾分でも具体的にするために、それを祖父は買ってきたのだつた。

「どこまでも穴を掘って行ったらしまいにはアメリカへ突き抜けてしまふわけだね」

こんなことを言つて祖父は、皆なを笑わせたり自分もさびしげに笑つたりした。

「純一は少しは英語を覚えたかね」

「覚えたよ」と彼は自慢した。

「大学校を出たらお前もアメリカへ行くのかね」

「行くさ」

「もしお父さんが帰ってきてしまったら？」

「それでも行くよ」

そんな気はしなかったが、間が悪かったので彼はそう言った。彼はこの年の春から尋常一年生になるはずだった。

「いよいよ小田原にも電話が引けることになった」

ある晩祖父はこんなことを言って一同を驚かせた。「そうすれば東京の義郎とも話ができるんだ」

「アメリカとは？」彼は聞いた。

「海があつてはだめだろうね」

祖父はまじめな顔で彼の母をかえり顧みた。

彼は誰もいない処でよく地球儀をもてあそ弄んだ。グルグルとできるだけ早く回転さすのがおも

しろかった。そして夢中になって、

「早く廻れ早く廻れ、スピンスピンスピン」などと口走ったりした。するといつの間にか彼の心持は「早く帰れ早く帰れ」という風になってくるのだった』

そこまで書いて私は退屈になって止めたのだった。いつか心持に余裕のできた時にお伽とぎばなし

噺はなしにでも書きなおそうなどと思っているが、それも今まで忘れていたのだった。球だけ取り脱はすして、よく江川の玉乗りの真似などして、

「そんなことをすると罰ばちが当るぞ」などと祖父から叱られたりしたことを思いだした。

「古い地球儀ですね」

「引越しの時から邪魔だった」

それからまた父の事がうっかり話題になってしまった。

「私はもうお父さんのことはあきらめたよ。家は私ひとりで行くよ」と母は堅く決心したらしくきつぱりと言った。私はたあいもなく胸がいつぱいになった。そうして口惜しさのあまり、

「その方がいいとも、帰らなくなつたつていいや、……帰るな、帰るなだ」と常規を脱した妙な声で口走つたが、ちょうど『お伽噺』の事を思いだしたところだったので、突然テレ

臭くなつて慌あわてて母の傍を離れた。

翌日の午ひるには、遠い親類の人たちまで皆な集つた。

「せめて純一がもう少し家のことを……」

「そういうことなら親父でも何でも遣やりこめるぐらいな気概がなければ……」

「ほんとにカゲ弁べんけい慶で——そのくせこのごろはお酒を飲むとむちやなことを喋しゃべつてかえつて怒らせてしまふんですよ」

「酒！ けしからん。やつぱり系統かしら」

叔父と母とがそんなことを言っているのを私は襖ふすま越こしで従いとこ兄妹たちと陽気な話をしていながら耳にした。私のことを話しているので——。

「この間もひどく酔つて……外国へ行つてしまふなんて言いだして……」

「純一が！ ばかな」

「むろん、あの臆おくびよう病にそんなことができるはずはありませんがね」と母は笑つた。

「気の小さいところだけは親父と違うんだね」

客が皆な席に整うと、私は父の代りとして末席に坐らせられた。坐っただけでもう顔が

赤くなつた気がした。

「今日はわざわざ御遠路のところをお運びくださいまして……（ええと？）じつは……その誠に恐縮きようしゆくなことで……そのじつは父が四五日前から止むを得ない自分自身（オツといけねエ）……ええ、止むを得ない自分用で、じつはその関西の方へ出かけまして、今日は帰るはずなのでございますがまだ……それで私が……（チョツ、弱つたな）……どうぞ御ゆるり……」

私はこれだけの挨拶をした。括弧かっこの中は胸での呟つぶやき言だった。ちゃんと母から教わつた挨拶でもつと長く喋らなければならなかつたのだが、これだけ言うのに三つも四つもペコペコとお辞儀ばかりしてごまかしてしまつた。そしてこの挨拶のしどろもどろを取りなすつもりで、胸を張つてできるだけでもつともらしい顔つきをして端坐たんざした。だが脇の下にはほんとうに汗が滲にじんでいた。

「これが本家の長男の純一です」

父方の叔父が、まだ私の知らない新しい親類の人に私を紹介した。そして私の喋り足りないところを叔父が代つて述べたてた。

だいぶ酒が廻つてきて、祖父の話が皆なの口に盛んにのぼっていた時、私は隣に坐つて

いる叔父に、

「僕の親父はなぜあんなに長く外国などへ行っていたんでしょね」と聞いた。今さら尋ねるほどの事もなかったのに――。

「やっぱりその……つまりこのお祖父^{じい}さんとだね、いろいろな衝突もあつたし……」

――やっぱり――と言った叔父の言葉に私はこだわった。

「何ぼ衝突したと言ったって……」

「今これでお前が外国に行けばちようど親父の二代目になるわけさ。ハツハツハツ……」

「ハツハツハ……。まさか――」とわたしも叔父に合わせて笑ったが、笑いが消えないうちに陰鬱^{いんうつ}な気に閉された。

翌日、道具を片付ける時になると母はまた押入の前で地球儀の箱を邪魔にし始めた。

「見るたびに焦^じれつたくなる」

「そんなことを言ったって、しようがないじゃありませんか」と私は言った。「どうすることもできない」

「たいして邪魔というほどでもない」

「だってこんなもの、こうしておいたって何にもなりはしない、いつそ……」

母は顔を^{しか}顰めて小言を言っていた。

——今に栄一が玩具にするかもしれない——私はもう少しでそう言うところだったが、突然またあの「お伽噺」を思いだすと、自分で自分を^{くすぐ}擦るような思いがして、そのまま言葉を呑みこんでしまった。

栄一というのは去年の春生れた私の長男である。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集37 牧野信一・梶井基二郎集」集英社

1968（昭和43）年8月12日初版発行

1970（昭和45）年1月5日2版

初出：「文藝春秋 第一巻第七号（七月創作附録号）」文藝春秋社

1923（大正12）年7月1日発行

入力：岡本ゆみ子

校正：noriko sato

2009年9月10日作成

2013年1月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

地球儀

牧野信一

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>